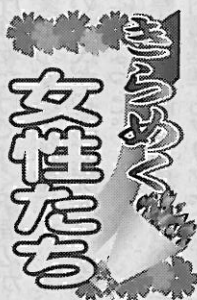


ふるさと経済

ECONOMY



五島灘酒造(新上五島町有川郷)は二〇〇七年二月設立。初代社長で夫の修一氏が病気のため五十六歳で〇八年一月に死去したに伴い、経営の先頭に立った。遺志を引き継ぎ十月一日、本格芋焼酎「五島灘」(七百二十ミリリットル、千四百九十一円)を発売した。

五島灘酒造社長

田本 喜美代さん(50)



夫の遺志を引き継ぎ完成させた芋焼酎「五島灘」を手にする田本喜美代さん＝新上五島町有川郷、五島灘酒造

夫の遺志継ぎ奔走

同町出身。二十歳で結婚した。長男を出産後、修一氏が立ち上げた建設会社で働いた。

十二年前のある日、夕食後に夫婦でくつろいでいると、修一氏がふとつぶやいた。「地元足りないのは何だろう」。そのころ公共事業は潤沢にあり仕事が順調だったため、不思議に感じたが、修一氏は「十年後、建設業はダウンする。なん

とかしないといけない。有川には宿泊施設が足りなため何かしたい」。畑を起業の準備を進めた。宿泊客に料理を提供する。借りに作った農産加工物を、酒造業は喜美代さんにとって未知の領域。「建設屋も一緒に始めよう」。そしていたのだ。

一方、官民の推進組織「焼酎を造ろう会」は現在解散。川郷)をオープンさせ、経営者になった。

〇六年のある日、夕食後間話をした際、「代表者がおらず、困っている」と町

職員。修一氏は同会に入り、起業の準備を進めた。修一氏の思いはともかく、酒造業は喜美代さんにとって未知の領域。「建設業も、ビジネスホテルもうまくいっている」と、当初は経営に携わらなかつたが、製造準備は進み、工場が〇七年九月に完成した。ちよとどそのころ、修一

活性化託した焼酎完成

氏が体調不良となり、検査のため島外の病院へ。夫妻は検査結果にがくせん。医師は、余命一カ月であることを告げた。いろんな治療法を試した。修一氏も回復を信じ、病床で仕事をした。だが、五島灘酒造の行く末を心配しながら息を引き取った。

喜美代さんは社長を継いだ。五里霧中。念願の焼酎製造免許が二月、下りた。「悔しかった。せめて免許を見せたかった」。製造に着手したが、原料の芋の確保などで難航した末に、約五キロの原液が出来上がった。初物の約二千五百本の五島灘は、完売する見込みだ。

「夫の遺志に沿い、無我夢中でできた焼酎。焼酎を愛され手に取ってもらい、みんなが集う一員になりたい」。今はそんな思いを強くしている。

(上五島支局・山下哲嗣)

11月1回掲載します